


～郷土かるたで故郷発見～

諏訪のいろはかるた (9)

全国各地に存在する郷土かるた。多くは絶版となり現在では入手が困難です。ふるさとの財産「諏訪いろはかるた(信濃文化研究会作成)」に詠われたかるたを紹介します。




狩猟が生活の方法であった時代は、弓矢が必需品であった。やがて武士が現れてその弓矢は兵器となった。とくに信濃のように名馬を産し鹿や猪などの鳥獣が多くいたところは、自然に狩猟が巧みとなりそれがすぐれた武技になった。弓には梓弓と真弓と

があった。いずれも丸木の弓であった。梓で弓を造ったことは「古事記」の古い話にもあって、大昔から信濃の梓弓は名が高かったようである。その中でも諏訪の梓弓は、八ヶ岳山麓からのもので材料の梓に粘りがあり、強靱であったといわれる。大宝二年(七〇二)に千二百張、慶雲三年(七〇六)には千四百張の梓弓が信濃国から朝廷に献上されたといわれる。献上された梓弓は、やがて九州太宰府に送られて、防人たちに渡された。防人たちは当時の諸国の中から選ばれた勇士たちであって、信濃からもはるばる九州におもむいて、吉岐・対馬などの守備に当たっていたものといわれる。



昔の諏訪湖はもっと大きく、八ヶ岳の麓まで続いていた。それがだんだん小さくなって、その名残として四賀の底無しの池などが残った。この沼の主はいたずらものの河童で、通る旅人を呼び止めては、ずるずると池に引きずり込んで食べてしまった。

この噂を聞いた諏訪藩でも豪勇で知られた立木さまという侍が「拙者が退治してやろう」と池にやって来た。河童は相手の計略を知らずいつものように声をかけて来た。「ござんなれ」と立木さまはそれに応じて手を握るや否や、馬に一鞭をあてて駆け出した。不意をつかれた河童はなす術もなく頭の皿の水も乾き、神通力を失ってしまった。哀れに思った立木さまは「これから悪さをするなよ」といって許してやったが、その時、河童が命を助けてもらったお礼にと骨接ぎの秘法を教え、立木さまは代々骨接ぎの医師となって人々を助けたといわれる。立木といえば、骨接ぎの代名詞になったのはそれからだ。

ふるさと・信濃の四季

リトグラフ版画で見る



春を知らせる蓼科湖畔



新緑の八島高原



雪の北アルプス



夜明け

湖上スターマイン



無病息災願い、どんど焼き

糸に染まる季節

新潟県十日町市に暮らしている染織家・岩田重信さんは、地元で育つ草を採り、その色を糸に染めこんでいる。「色には季節がある」と言った岩田さんの言葉が気になった写真家の大西暢夫さんが優しい文章を添えて、日々の仕事ぶりを紹介している。

「僕たちが忘れかけている暮らし方があるように思う。その土地にあった季節の流れに沿った生活」。岩田さんは、その当たり前を繰り返している」と。

(渡辺奈美)



大西暢夫 写真・文

岩崎書店

2月の暦 遷座祭 河西道雄 作

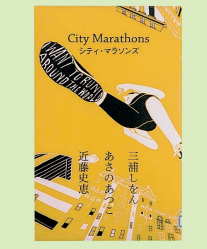


シティ・マラソンス

文藝春秋

ニューヨーク・東京・パリ、それぞれのシティマラソンを、三浦しをん・あさのあつこ・近藤史恵が描く。社長命令でなぜかニューヨークシティマラソンに出場することになった主人公・広和。しかし走りたくないと願うランナーをニューヨークはおおらかに迎えてくれた。そして世界中のランナーを魅了し続け、走ることに喜びと楽しさの本質をシティマラソンは教えてくれる。ゴールだと思ったところが、実は次の何かのスタート地点だと思わせてくれる。

(酒井智寿子)



三浦しをん・近藤史恵 あさのあつこ 著